

木村さんと鈴木さん

長谷川彩

登場人物

木村亜季きむらあき……歌子、忠夫の娘。仁志の婚約者。

鈴木昭子すずきしょうこ……亜季の叔母。忠夫の妹。

木村歌子うたこ……亜季の母。忠夫の妻。

木村忠夫ただお……亜季の父。昭子の兄。歌子の夫。

田邊仁志たなべひとし……亜季の婚約者。

一軒家の居間。

和室の中央にローテーブル、座布団が数枚。

襖で仕切られた向こうは廊下。

男（忠夫）が耳かきをしている。

玄関から呼び鈴の音。

歌子の声 はいはいはいはい。

居間の前を通り過ぎる足音。

玄関の戸が開く音。

昭子の声 どうもお。

歌子の声 はい、いらつしやい。ごめんね、今日ね。

昭子の声 いいええ。これね。

歌子の声 やだ、いいのに。

昭子の声 うん、いいのいいの。

歌子の声 ごめんなさいね、いただきますー！。

昭子の声 どうぞお。あら。

歌子の声 あら。

昭子の声 ちよつとお姉さん。

歌子の声 あら。

昭子の声 ふっくらしたんじゃないの。

歌子の声 あらやだ。

昭子の声 あらやだ。

歌子の声 太った？

昭子の声 （笑って）やだ！

歌子の声 （笑って）あらやだ！

昭子の声 （笑って）うん、違う違う！

歌子の声 （笑って）やだもう！

昭子の声 戻ったねって言うの。

歌子の声 あらあ。

昭子の声 顔色良くなった。

歌子の声 そう？

昭子の声 うん、良くなったもん。

話し声と足音が近づいてくる。

忠夫、耳かきを自分の座る座布団の下に入れる。

襖が開き、菓子折の紙袋を持った女（歌子）と、もう一人女（昭子）が入ってくる。

歌子 お父さん、昭子ちゃん。

昭子 はい、お邪魔様。
歌子 はい、どうも。
昭子 やだ、お兄ちゃん太った？
忠夫 はい？
昭子 (座りながら) 顔丸くなったもん。(歌子に) ねえ。
歌子 (座りながら紙袋をテーブルに置き) ほら言われた。
忠夫 そんなことありませんよ。
昭子 あんたが肥えてどうするの。
歌子 だから歩けって言うの。
昭子 何、言われた？
歌子 言われた、血糖値。
昭子 あらあ。(紙袋を自分に寄せ) 目の毒ねえ。
忠夫 (紙袋を自分に寄せる) 目の毒ねえ。
歌子 一日一個。
忠夫 わかってますよ。
昭子 (歌子に) 何、歩くといいですか。
歌子 アレよ、お隣さん。お医者さんに言われて、一日三十分。
昭子 やだ、毎日？
歌子 もう全然違う。
昭子 へえ。
歌子 ベルトの穴減ったって。
昭子 やだ。
歌子 二つも。
昭子 (盛り上がって) やだあ！
歌子 (盛り上がって) やでしょお！
忠夫 よそでやりなさい。
歌子 (忠夫を示し) これですよ。
昭子 何この人。
歌子 血糖値言うとこれ。
昭子 感じの悪い。
忠夫 悪くないでしょう。
昭子 ご挨拶ですよ、自分で呼び出しておいて。
忠夫 僕じゃありませんよ。
昭子 は？
忠夫 (歌子に) 何かあるんでしょう。
歌子 (昭子に) そうなのよ。
昭子 あら、お姉さんだった？
歌子 だったのよ。
昭子 言ってよお。
歌子 ごめんなさいねえ。

昭子 うん、何でした、お話。
歌子 アレよ、昭子ちゃん、お式よ。
昭子 はい、亜季ちゃんの。
歌子 亜季のですよ。
昭子 何です。
歌子 決めた？
昭子 何、決めたって。
歌子 何着ます？
昭子 あ、お衣装？
歌子 何着ます？
昭子 私ね、ドレスにしました。ロングのやつ。
歌子 うん、駄目駄目。
昭子 あら、駄目？
歌子 そんなことだろうと思いました。
昭子 新調したんですよ。
歌子 駄目駄目。
昭子 じゃあ何がいいです？
歌子 黒ありますから。
昭子 何、黒って。
歌子 アレよ、留袖よ。
昭子 え。やだお着物。
歌子 何が嫌ですか。
昭子 窮屈。
歌子 いいのよ、正装ですよ。
昭子 ドレス駄目ですか？
歌子 駄目駄目。
昭子 新調したのに。
歌子 よそで着なさい。
昭子 えー。
歌子 えーじゃない。
昭子 やだ。
歌子 やだじゃない。
昭子 やだやだ！
歌子 やだやだじゃない！
忠夫 よそでやりなさい。

昭子と歌子、忠夫を見て、無視して立ち上がる。

昭子 お姉さんいいですよ、お母ちゃんので。
歌子 はい、いただいたね。お形見ね。

昭子と歌子、話しながら去る。

昭子の声 私ありませんもの、旦那のお姉さんもらっていききましたから。
歌子の声 うん、いいのいいの。
昭子の声 何、レンタルします？
歌子の声 うん、考えてますから。
昭子の声 やだ、何何。

声が遠ざかっていく。
間。

忠夫、おもむろに紙袋の中を覗き、中身を取り出す。

忠夫 (笑って) ほっ。

忠夫、包装紙を丁寧に開け、箱のふたを開ける。

忠夫 (笑って) ほほっ。

忠夫、一つ手に取る。

玄関の戸が開く音。

亜季の声 ただいまあ。

忠夫、動きが止まる。

仁志の声 お邪魔します。

亜季の声 はい、どうぞ。いって、靴。

仁志の声 いや、一応。

亜季の声 誰が見るの。

仁志の声 いや、一応。

亜季の声 部屋二階ね。

仁志の声 うん、あの、ご挨拶だけ、先に。

亜季の声 はいはい。

話し声と足音が近づいてくる。

忠夫、慌てて箱のふたを閉めようとして、思い直してもう一つ菓子を取り、菓子二つを座布団の下に隠す。

菓子箱と包装紙を紙袋に押し込み、テーブルの下に隠す。
襖が開く。

菓子折の紙袋を持った女（亜季）と、荷物を持った男（仁志）が入ってくる。

亜季 ただいま。

仁志 失礼いたします。

忠夫 はい、どうも。

仁志 お父さん、ご無沙汰しております。

忠夫 どうも。

亜季 （紙袋をテーブルに置き、座りながら）お母さんは？

忠夫 （紙袋の中を覗き）奥。

亜季 太った？

忠夫 はい？

亜季 顔丸くなったもん。（仁志に）ねえ。

仁志 え？

忠夫 そんなことありませんよ。（仁志に）ねえ。

仁志 ええ、そんなことは。

亜季 嘘だ、丸くなったよ。

仁志 お前だろ、丸くなるのは。

亜季 私はなつてもいいでしょ。

忠夫 （仁志に）どうぞ、座って。

仁志 （座ろうとして）あ、はい、恐れ入ります。

亜季 荷物は？

仁志 （立ち上がり）ああ、荷物。

忠夫 後でいいじゃない。

仁志 （座ろうとして）ええ、後で。

亜季 今やっちゃえば？

仁志 （立ち上がり）うん、今。

忠夫 （座るよう促し）着いたところでしょう。

仁志 （座ろうとして）ええ、今。

亜季 そんなに遠くないじゃん。

仁志 （立ち上がり）うん、そんなに。

忠夫 （座るよう促し）休ませてあげなさい。

仁志 （座ろうとして）ああ、いえ。

亜季 疲れてないから。

仁志 （立ち上がり）うん、あの。

忠夫 （仁志に）疲れてますね。

仁志 （座ろうとして）ええ、まあ。

亜季 （仁志に）疲れてるの？

仁志 （立ち上がり）いや、まあ。

亜季・忠夫 どっち。

仁志 大丈夫です！

忠夫 じゃあお願いしますよ。
亜季 お問い合わせします。
仁志 あ、はい。

仁志、荷物を持って去る。
亜季、テーブルの下の菓子に気づく。

忠夫 後で布団も二階上げてもらいなさい。

亜季 お母さんは？

忠夫 何が。

亜季 誰か来てる？

忠夫 叔母さん来てるぞ。

亜季 え、昭子叔母ちゃん？

忠夫 奥。

亜季 えー、叔母ちゃん久しぶり。

忠夫 後で挨拶しなさい。

亜季 (テーブルの紙袋から中身を取り出し) え、何。

忠夫 ん？

亜季 (包装紙を開けながら) 叔母ちゃん呼んで。

忠夫 うん。

亜季 お母さん？

忠夫 ん？

亜季 (面倒になり包装紙を破る) 話。

忠夫 開け方。

亜季 (笑う)

忠夫 開け方ですよ。

亜季 小腹すいちゃって本当。

忠夫 (手を出す) 順調な証拠。

亜季 食べるの？

忠夫 ん？

亜季 いいの、血糖値。

忠夫 一個ですよ。

亜季 へえ。

亜季、テーブルの下から紙袋を引っ張り出す。

亜季 (にやつきながら) 一個ですかあ？

忠夫 あ。

亜季 血糖値ー。

忠夫 いやいや。

亜季 血糖値ですよー。
忠夫 ちよつとじゃないの。

亜季、菓子箱や紙袋などすべて抱え、立ち上がる。

亜季 回収ー。
忠夫 ちよつと。

亜季、足で襖を開ける。

忠夫 こら、足。

亜季、笑ってごまかし、襖を開けたまま去る。

忠夫 閉めなさい。

忠夫、立ち上がり、襖を閉める。

亜季の声 ただいまー。

昭子の声 あら、亜季ちゃん。

亜季の声 お久しぶりですー。

忠夫、座布団に戻る。

間。
座布団の下から菓子を取り出す。

忠夫 (笑って) ほほほつ。

忠夫、菓子の包みを開けようとする。
襖が開く。

忠夫、慌てて菓子を隠そうとする。

仁志、入ってくる。

仁志 お父さん、失礼いたします。

忠夫 (菓子をテーブルに置き) 君か。

仁志 は。

忠夫 悪かったですね、荷物ね。

仁志 いえ。

忠夫 (向かいを勧め) 申し訳ない。

仁志 ……失礼いたします。

仁志、意を決した様子で、座布団を避け忠夫の前に座る。

忠夫 何。

仁志 お父さん。

忠夫 はい。

仁志 このたびは、（頭を下げ）申し訳ございませんでした。

忠夫 は？

仁志 お母さんが大変な時に、僕のせいでいらぬご心配、ご心労をおかけしてしまい、誠に申し訳ございませんでした。

忠夫 ああ、いやね。

仁志 （遮って）お父さん、並びにお母さん、ひいてはご親族様におかれましては、さぞ僕への不信任を、そして抵抗感を、果ては嫌悪感を募らせたことと、深く後悔と反省をくり返しているところでございます。

忠夫 （遮って）いや、あのね。

仁志 （遮り返し）しかし、これはすべて僕が至らないばかりに起こったことであり、決して、まったく、一切、亜季さんに非はないのであると、これだけは私、声を大にして申し上げる所存であります。

忠夫 （遮って）うん、あのね。

仁志 （遮り返し）もちろん、亜季さんがそのようなうかつな、軽率な、無分別なお嬢さんなどではないということは、お父さん、並びにお母さん、ひいてはご親族様におかれましては、もうご説明申し上げるまでもないことでして。

忠夫 （遮って）はい、だから。

仁志 （遮り返し）しかしながら、一体何故このような事態になったのかと申しましたら、これはひとえに僕の不注意で。

忠夫 不注意。

仁志 いえ、不手際で。

忠夫 不手際。

仁志 いえ、無防備で。

忠夫 落ち着きなさい。

仁志 お父さん。

忠夫 ああ、はい。

仁志 私、田邊仁志、本日はどのようなお叱りも甘んじて受け入れる覚悟で参りましたからにはお父さん。

忠夫 はい。

仁志 （更に頭を下げ）僕を殴ってください！

忠夫 君はさつきから何を言ってるの。

襖が開く。

歌子、急須と湯呑三つを盆に載せ、入ってくる。

歌子 あー。
仁志 はっ、お母さん。
歌子 (忠夫に) やだ、お父さんいじめて。
忠夫 いじめてませんよ。
歌子 いじめたよ。(仁志に) ねえ。
仁志 いいえ、これは。
忠夫 (歌子に) ほら。
歌子 (仁志に) 言えないよねえ、いじめた人の前でねえ。
仁志 いいえ、お母さん。
忠夫 (仁志に) 言ってやってください。
仁志 僕が悪いんです。
忠夫 そうじゃなくて。
歌子 (急須を回しながら、仁志に) いじめる人にはお茶あげないからねえ。
忠夫 くださいよ。
仁志 (歌子に向き直り) お母さん、このたびは。
歌子 (湯呑に茶を注ぎながら、仁志の言葉を遮って) 泊まっていられますね、仁志さん
ね。
仁志 は？ あ、はい。
歌子 (湯呑を覗き込み) アレよ、客間使ってくださいね。
仁志 はい。はい？
忠夫 亜季の部屋じゃないの。
歌子 (湯呑の茶を急須に戻し) 危ないでしょ、二階。(仁志に) ねえ。
仁志 (オウム返しに) 危ない。
忠夫 何が。
歌子 (急須を回しながら、仁志に) アレだよねえ。
仁志 (オウム返しに) アレ。
忠夫 何。
歌子 (仁志に) 段差だよねえ。
仁志 (オウム返しに) 段差。
忠夫 階段。
歌子 (仁志に) 階段だよねえ。
仁志 (オウム返しに) 階段。(合点がいき) あ、階段。ああ、そうか、階段。
歌子 荷物二階持ってっちゃった？
仁志 あ、はい。
歌子 あらあ、先言えばよかったねえ。
仁志 いいえ、もう、気がつきませんで。
歌子 ううん、先言ったらよかった、おばちゃん。
仁志 そんなとんでもない。
歌子 じゃあね、仁志さん、悪いですけど。

仁志 (立ち上がり) はい。
歌子 一番奥ですから。お願いしますね。
仁志 はい。失礼いたします。
歌子 はい、どうもお。

仁志、去る。

歌子、湯呑に茶を注ぐと中を見て、茶を急須に戻す。

歌子 (急須を回しながら) もうちよつと。

忠夫 (手を出し) 何。

歌子 何が。

忠夫 (手招きして) 話しましたか。

歌子 (急須を渡し) まだ。

忠夫 (受け取り) ん。

歌子 来るの早かったわ、亜季。

忠夫 (急須を回しながら) 今日がいいの。

歌子 うん、早い方がいい、こういうのは。

忠夫 あ、そう。

歌子 そうよ。

忠夫 いいの。

歌子 何が。

忠夫 僕話しましょうか。

歌子 うん、女同士がいい、こういうのは。

忠夫 あ、そう。

歌子 そうよ。

忠夫 いいの。

歌子 だから何が。

忠夫 うん。

歌子 うんって何。

忠夫 うん。

歌子 (立ち上がりながら) うんとかアレとかはつきりしない。

忠夫 あなたもでしょう。

歌子、テーブルの菓子を取る。

忠夫 あ。

歌子 いくつ食べるの。

忠夫 一個じゃないの。

歌子 亜季が食べてたよって。

忠夫 食べてませんよ。

歌子 目の毒。

歌子、去りながら菓子を食べる。

忠夫 こら、立って。

歌子、笑ってごまかし、襖を開けたまま去る。

忠夫 閉めなさい。

忠夫、立ち上がり、襖を閉める。

座布団に座り、急須を回す。

短い間。

湯呑に茶を注ぎ、飲む。

忠夫 (渋い顔をして) やりすぎた。

忠夫、湯呑に茶を注いでいく。

注ぎ終え、一息つく。

おもむろに、座布団の下から菓子を取り出す。

忠夫 (笑って) ほほほほっ。

襖が開く。

忠夫、慌てて菓子を隠そうとする。

仁志、入ってくる。

仁志 失礼いたします。

忠夫 (菓子をテーブルに置き) 君か。

仁志 は。

忠夫 すみませんね、荷物ね。

仁志 あ、いいえ、とんでもない。

忠夫 (向かいに湯呑を差し出し) 申し訳ない。

仁志 恐れ入ります。

仁志、忠夫の向かいに座る。

仁志 お父さん、こんな僕にお茶を。

忠夫 いいえ。

仁志 その上お菓子まで。

忠夫 え？ ああ……。
仁志 僕なんかにお気遣いなど。
忠夫 (嬉しそうに菓子に手を伸ばし) ああ、そう。
仁志 (菓子を手に取り) ありがとうございます。
忠夫 あ……。どうぞ。
仁志 (包装を開け) いただきます。
忠夫 (惜しそうに) ああ……。

襖が開く。

亜季、顔を覗かせる。

亜季 ねえ、荷物は？

仁志 (菓子を置き) あ、客間に。

亜季 え、なんで？

忠夫 危ないだろう。

亜季 何が。

忠夫 アレだ。

亜季 何。

忠夫 (仁志に) ねえ。

仁志 階段が。

亜季 ああ。いいのに、まだお腹そんなに出てないし。

忠夫 うん、いい。客間にしなさい。

仁志 (亜季に) 何だった？

亜季 着替え。

仁志 (立ち上がりながら) 出そうか。

亜季 うん。

忠夫 自分でやりなさい。

仁志 あ、いえ。

忠夫 仁志君にやらせて。 (仁志に) ねえ。

仁志 いえ、そんな。

亜季 いいじゃん別に。 (仁志に) ねえ。

仁志 うん、それは。

亜季・忠夫 どっち。

仁志 大丈夫です！

忠夫 じゃあお願いしますよ。

亜季 お願いしまーす。

仁志 あ、はい。

仁志、去る。

亜季、自分の爪をいじっている。

忠夫 いつもあの調子か。
亜季 やってくれる。
忠夫 あんまり甘えるんじゃないやありませんよ。
亜季 いいじゃん。
忠夫 何がいいの。
亜季 ……。
忠夫 甘えて。
亜季 お母さん痩せた？
忠夫 ん？
亜季 お母さん。
忠夫 何。
亜季 何。
忠夫 ん？
亜季 ……。
忠夫 ちょっと増えたって言ったぞ。
亜季 (笑って) 嘘だ。
忠夫 顔色良くなっただって言って。
亜季 誰が。
忠夫 叔母さん。
亜季 (笑って) 嘘だ。
忠夫 何。
亜季 ん？
忠夫 どうした。
亜季 うん。
忠夫 (座布団の下から爪切りを取り出し) ん。
亜季 いい。
忠夫 気になるんだろう。
亜季 いい。
忠夫 (爪切りを座布団の下にしまい) いる時言いなさい。
亜季 え、どこから出した？
忠夫 (爪切りを出し) ここ。
亜季 (笑って) また。
忠夫 (しまい) 便利だぞ。
亜季 (笑って) えー。

襖が開く。

仁志、衣類を持って入ってくる。

仁志 (亜季に差し出し) 何でもいい？

亜季 (受け取り) うん。
忠夫 風呂入ったらどうだ。
亜季 いい。

亜季、襖を開けたまま去る。

忠夫 (襖の外に) 疲れ取れるぞ。
亜季の声 うーん。

忠夫 (仁志に) 申し訳ない。

仁志 (襖を閉め) ああ、いいえ。

忠夫 甘えてる、君に。

仁志 いえ。

忠夫 ねえ。

仁志 ……張り詰めていたので、彼女。

忠夫 うん。

仁志 このところ。

忠夫 あ、そう。

仁志 僕がもっと支えなければいけなかったんですが。

忠夫 いやいや。

仁志 至りませんで。

忠夫 良くやってくれていますよ。

仁志 いえ。

忠夫 聞いてますよ。

仁志 ……すみません。

忠夫 まあね、良かったんじゃないですか、亜季もね、君で。

仁志 ……。

忠夫 良かったですよ。

仁志 ……すみません。

忠夫 まあ、アレですよ。言ってなかったですけども、仁志君ね。

仁志 はい。

忠夫 あの子をね、頼みますよ。

忠夫、軽く頭を下げる。

仁志、感極まった様子で、深く頭を下げる。

忠夫、うなづく。

間。

仁志、なかなか頭を上げない。

忠夫 ……うん、そろそろ。

仁志 (頭を下げたまま) お父さん。

忠夫 はい。

仁志 僕は、今日お叱りを受けるために呼ばれたのでは……。

忠夫 ……違いますよ。

仁志 ……違いますか。

忠夫 ……違いますよ。

仁志 (頭を上げ) 違うんですか？

忠夫 いや、僕は最初からそう言ってるんですけどもね。

仁志 え、いや、ああ、もう。すみません、僕もうてつきり。

忠夫 早合点してるんだもの。

仁志 お叱りを受けるものだとばかり。

忠夫 早合点してるんだもの。

仁志 すみません、どうにもそそっかしくて。

忠夫 人がいい証拠。

仁志 すみません。……あの、それでは、お話というのは……。

忠夫 ああ、話ですか。

仁志 はい。

忠夫 そうねえ。

昭子の声 やだやだ！

歌子の声 待って待って！

二人、声の方を見る。

仁志 (忠夫に向き直り) お話というのは。

忠夫 ああ。

仁志 はい。

忠夫 そうね。

仁志 はい。

忠夫 まあ。

仁志 はい。

忠夫 ねえ。

仁志 はい。

忠夫 ……。

仁志 ……。

忠夫 (仁志が引かないため、諦め) ……アレですか、仁志君は。

仁志 はい。

忠夫 どこまで話してましたか、亜季は。

仁志 は。

忠夫 うちのことですけども。

仁志 ああ、ええ、あの、亜季さんの。

忠夫 うん。

仁志 本当のご両親の。
忠夫 うんうん。
仁志 ああ、ええ、あの、亜季さんも知らないと。
忠夫 うんうんうん。
仁志 伺っております。
忠夫 そうね。
仁志 はい。
忠夫 そうね。
仁志 今日は、そのお話で。
忠夫 うーん。
昭子の声 やだやだやだやだ！
歌子の声 待つて待つて待つて待つて！

二人、声の方を見る。

忠夫 (立ち上がりながら) 申し訳ない。
仁志 いえ。
忠夫 (襖を開け、廊下を覗き) 今ちよつとね。
仁志 どなたか。
忠夫 うん、亜季の。
仁志 亜季さんの。
忠夫 いや……僕の。
仁志 お父さんの。
忠夫 まあ……何と言いますか。
仁志 何と言いますか。
忠夫 とりあえずまあ、僕のアレです。
仁志 は？
歌子の声 待ちなさいよ！
昭子の声 嫌よ！
歌子の声 話はまだ終わってないわよ！
昭子の声 話すことなんてありません！
仁志 ……は？
忠夫 うん。
仁志 うん、いや、え！

足音が近づいてきて、襖の向こうに昭子、続いて歌子の姿が見える。

昭子 (仁志ににこやかに) あらどうもお。
仁志 あ……。
歌子 (仁志ににこやかに) はいどうもお。

仁志 ああ……。

昭子、歌子、止まらずに通り返る。

昭子の声 ちよつと離して！

歌子の声 帰しませんよ！

昭子の声 やめてください！

歌子が昭子を引つ張りながら、二人、戻ってくる。

歌子 (仁志ににこやかに) うるさいねえ。

仁志 あ、いえ……。

昭子 (仁志ににこやかに) ごめんねえ。

仁志 いえ……。

昭子、歌子、止まらずに通り返る。

昭子の声 帰ります！

歌子の声 帰しません！

昭子の声 帰りますったら！

仁志、呆気にとられる。

忠夫、襖を閉める。

忠夫 ちよつと込み入ってまして。

仁志 そりゃあ込み入るでしょう！

忠夫 申し訳ない。

仁志 (居住まいを正し) お父さん。

忠夫 はい。

仁志 このことですな、お話というのは。

忠夫 なんて察しのいい。

仁志 お父さん。

忠夫 はい。

仁志 僕は、あなたを尊敬していました。

忠夫 は？

仁志 僕の不出来をお叱りにもならず、お母さんを心身共に支えられ、そして何より、亜季さんを我が子として愛し、あれほど素晴らしいお嬢さんに育てられた。

忠夫 こりゃどうも。

仁志 僕は亜季さんに、お二人のような夫婦になろうと、そうプロポーズしました。

忠夫 ああ、そうですか。

仁志 これが何かの間違いだと思いたい。

忠夫 え、プロポーズが？

仁志 しかし、起こってしまったことは仕方ありません。

忠夫 何、後悔してるの？

仁志 今からでも遅くないはずです。

忠夫 え、やめるの？

仁志 お父さん。

忠夫 はい。

仁志 目を覚ましてください。

忠夫 は？

昭子の声 嫌ですよ！

歌子の声 お願いしますよ！

仁志 お父さん！

忠夫 ちょっと待ってもらえる？

忠夫、立ち上がり、襖を開ける。

忠夫 (外に向かつて) うるさい。

仁志 (驚愕し) うるさい……！！

忠夫 (襖を閉め) 申し訳ない。

仁志 お父さん。

忠夫 はい。

仁志 見損ないました！

忠夫 は？

仁志、去る。

忠夫 (菓子を手に取り) いらないの？

忠夫、首をひねりながら、菓子を見つめる。

忠夫 (笑って) ほほほほつ。

襖が開く。

歌子、続いて昭子、入ってくる。

忠夫、慌てて菓子を隠そうとする。

歌子 (菓子を見て) あ。

忠夫 いやいや。

昭子 (菓子を見て) あー。

忠夫 いやいやいやいや。
昭子 三つ目よ、お姉さん。
歌子 (菓子を取り上げ) 血糖値ですよ。
忠夫 仁志君が食べないから。
昭子 あら、お嬢さんは。
忠夫 どこでしょう。
昭子 どこでしょうって。
歌子 あ、またいじめたんだ。
忠夫 違いますよ。
昭子 やだ、いじめるの、この人。
歌子 いじめるのよ、この人。
昭子 (盛り上がって) やだあ！
歌子 (盛り上がって) やでしょお！
忠夫 話終わったの。
歌子 まだ。
忠夫 なんて。
歌子 嫌だって、昭子ちゃん。
忠夫 (昭子に) なんで。
昭子 嫌ですよ、わかりませんか。
歌子 わかんない。
昭子 (忠夫に) これだもん。
歌子 (忠夫に) わかんないんだもん。
忠夫 わかりました。
昭子 お兄ちゃんがわかってどうするの。
忠夫 お母さんね、僕話しますから。
歌子 えー。
忠夫 うん、お母さんね、アレ探してください。
歌子 何。
忠夫 アレ。
歌子 (座布団を示し) そこじゃないの？
忠夫 ないの。
歌子 私知りませんよ。

歌子、去る。

昭子 (座りながら) アレでわかるの？

忠夫、座布団の下から耳かきを取り出す。

昭子 何。

忠夫 (テーブルに置き) これ。
昭子 アレ？
忠夫 これ。
昭子 あるんじゃないの。
忠夫 あるんですよ。
昭子 いやらしい。
忠夫 何ですって、あの人。
昭子 聞いてないの？
忠夫 何ですって。
昭子 アレよ、留め袖よ、お母ちゃんの。
忠夫 うん。
昭子 私にアレ着ろって。自分はレンタルですって。何考えてるの、あの人。
忠夫 わかるだろう。
昭子 何が。
忠夫 あの人の言うことですよ。
昭子 わかりませんよ。
忠夫 わかるだろう。
昭子 ……。
忠夫 話してちょうだいってことでしょう。
昭子 ……。
忠夫 いつ話すの、亜季に。
昭子 ……言えないでしょう、こんな時に。
忠夫 じゃあいつ言うの。
昭子 重なりすぎなもの。
忠夫 先延ばしにしたのは誰ですか。
昭子 ……。
忠夫 あなたね、はじめ亜季が高校生になったら、言いましたね。
昭子 言いましたね。
忠夫 そうしたら、成人したらにしますって言って。それから就職したら、結婚したら、子供産んだら。
昭子 (遮って) 私も考えてます。
忠夫 (遮って) 最後は何ですか、自分がいなくなったらですか。
昭子 ……。
忠夫 ねえ。いつですか。
昭子 ……悪いの、お姉さん。
忠夫 ……あなたがいつかは話すと思うから、あの子には最初から全部話してるんですよ。
昭子 ……。
忠夫 色んな思いもしたでしょうよ。言いませんけどもね、あの子は。一言も。
昭子 ……。
忠夫 強い子ですよ。

昭子 育てたのは二人でしょう。
忠夫 そうですよ。
昭子 それを今さら出しゃばって。
忠夫 ……。
昭子 どの口が言えますか。
忠夫 僕らはね、あなたがいるもんだから、ここまでやってこられたのもあるですよ。
昭子 それは違いますよ。
忠夫 違いますよ。
昭子 だって引き取れたもの。
忠夫 ……。
昭子 鈴木はいいって言いましたよ。二人ほど立派でなくとも、自分達もやってやれない
ことはないって。
忠夫 ……。
昭子 私断ったもの。申し訳なくて。
忠夫 ……。
昭子 申し訳なくて。
忠夫 誰に。
昭子 ……悪いの、お姉さん。
忠夫 ……僕はね。
昭子 はい。
忠夫 ……亜季を育てたのはあの人ですよ。
昭子 わかっていますよ。
忠夫 お前には悪いけども。
昭子 悪かないですよ。
忠夫 亜季にも悪いけども。
昭子 ……。
忠夫 あの人にも悪いけども。
昭子 ……。
忠夫 母ちゃんのはね、あの人に着せてやってほしいんですよ。
昭子 ……そう言ってるんじゃないの、私は。
忠夫 うん。
昭子 最初から。
忠夫 うん。
昭子 ……そう言ってるんじゃないの。
忠夫 ……申し訳ない。
忠夫 ……申し訳ない。
忠夫 頭を下げる。
襖が開く。
仁志、入ってくる。

仁志 お父さん、先ほどは取り乱しまして。

仁志、昭子と頭を下げる忠夫の間にある耳かきを見て、絶句する。

昭子 あらどうもお。

忠夫 どこ行つてたの。

仁志 お父さん！

忠夫 はい。

仁志 耳かきくらい、ご自分でなさつたらいかがですか！

昭子・忠夫 は？

歌子、仁志の背後から顔を覗かせる。

歌子 何、大きい声出して。

仁志 (慌てて) お母さん！

歌子 ないわよ、お父さん。(耳かきを見て) あ。

仁志 ああ、お母さん、これは。

歌子 もう。

仁志 落ち着いて、まずは深呼吸を。

忠夫 (耳かきを持つて、笑い) ほほっ。

仁志 笑つてる場合ですか！

歌子 もう知りません。

歌子、去る。

仁志 お母さん、お気を確かに！

昭子 (忠夫に) ほら、怒られた。

忠夫 なあ、怒られた。

仁志 あなた達は鬼か！

昭子・忠夫 怒られた。

亜季、髪をタオルで拭きながら、仁志の背後から顔を覗かせる。

亜季 何、大きい声出して。

仁志 亜季！ (亜季を抱きしめ) 見るな！

亜季 え！ 何。

昭子 (にやついて) あらあ。

忠夫 おいおい、君ね。

仁志 君には見せられない！

亜季 何、やだ虫！？

昭子 (辺りを見回し) やだ！
忠夫 (辺りを見回し) どこだ！
亜季 ちよっと、どこ！？
仁志 大丈夫、亜季は何も心配しないで。
亜季 だからどこ！
忠夫 (座布団の下から覗く爪切りを取り) これじゃないか？
昭子 え。何、やだもう。
亜季 ちよっと、仁志。
忠夫 これじゃないか、仁志君。
仁志 僕は何があっても、耳かきだけは自分でするからね！ (亜季を抱きしめる)
亜季・昭子・忠夫 はあ？

歌子、殺虫剤片手に駆け込んでくる。

歌子 どこ！？ (辺りを見回し) 何してるの。
昭子 何でしょう。
忠夫 (亜季から仁志を引きはがし) 疲れてるんだな、仁志君な。
仁志 一体誰のせいだと思ってるんですか。
忠夫 いいんだ、誰も悪くない。
仁志 あなたって人は！
歌子 仁志さん具合悪いの？
仁志 お母さん、下がっててください、お体に障ります。
歌子 え、うつるの？
忠夫 うん、仁志君、あつちでゆっくり話そう。
仁志 いいでしょう、望むところです。
忠夫 うん。お母さん。
歌子 はい。

忠夫、うなずき、去る。

歌子 ……。
仁志 亜季。
亜季 何。

仁志、うなずき、去る。

亜季 え、何？
歌子 昭子ちゃん。
昭子 はい。

歌子、うなずき、去る。

昭子 ……。

亜季 何、今の。

昭子 何でしょう。

亜季 あ、知ってる顔だ。

昭子 (笑う)

亜季 何よ。

昭子 うん、いいの、亜季ちゃんは。

亜季 また。何も教えてくれませんね、大人達は。

昭子 そのうちね。

亜季 嘘ばかり。

昭子 そのうちよ。

亜季 言わなかったじゃん。

昭子 何。

亜季 お母さん。

昭子 うん、言いにくい、体のことは。

亜季 お父さんは言ったじゃん。

昭子 心配しないでしよう、そっちは。

亜季 (笑って) してますよ、どっちも。

昭子 うん、亜季ちゃんが良い子よ。

亜季 え、言わない？ 普通。

昭子 何。

亜季 病気したら、普通。

昭子 言うね。

亜季 でしょ。

昭子 そうね。

亜季 親子ならさあ。

昭子 ……。

亜季 言うんじゃないの、普通。

昭子 言っただけだった。

亜季 言っただけだよ。

昭子 うん。

亜季 そうじゃないの、普通の親子は。

昭子 うん。

亜季 普通ってなんかよくわかんないけど。

昭子 怒ってるね、亜季ちゃん。

亜季 怒ってるよ。

昭子 怒ってるか。

亜季 言わないけどさあ。

昭子　なんで。
亜季　言えないけどさあ。
昭子　何。
亜季　……順番違った。
昭子　何、そんなこと。
亜季　そんなことじゃないでしょ。
昭子　なんてことない。
亜季　思ってるよ、みんな。
昭子　思ってるよ、みんな。
亜季　なんで。
昭子　今日日誰が気にしますか。
亜季　言わないだけでしょ。
昭子　言わないなら思ってるよ。
亜季　そんなわけないじゃん。
昭子　なんでそう思うの。
亜季　私は思ってるもん。
昭子　……。
亜季　病気隠したりさあ、体気にしないでお菓子食べたりさあ、二人でアレとかうんとか
で通じ合ってるのとかさあ、私だけ知らないのとかさあ。
昭子　（笑う）
亜季　子供もさあ。
昭子　……。
亜季　なんで怒らないの。
昭子　……怒らないのが嫌？
亜季　……同じことして。
昭子　……怒られたいか。
亜季　……。
昭子　ね。
亜季　……私ばかり怒ってる。
昭子　うん。
亜季　……。
昭子　怒られたいか。
亜季　……だって、怒るんじゃないの、普通。
昭子　うん。
亜季　怒るでしょ、普通。
昭子　うん。
亜季　親なら。
昭子　……叔母ちゃんね、普通はよくわからない。
亜季　うん。
昭子　子供いないから。

亜季 うん。
昭子 叔母ちゃんだったら怒らない。
亜季 ……。
昭子 親は怒らない。喜ぶ。普通。
亜季 ……。
昭子 叔母ちゃんそう思う。
亜季 ……。
昭子 思わないか。
亜季 ……。
昭子 よし、(立ち上がり) じゃあね、叔母ちゃんやってあげます。
亜季 何。
昭子 叔母ちゃんが怒ってあげます。
亜季 (笑って) え？
昭子 叔母ちゃんが、お父さんとお母さんの代わりに、亜季ちゃん怒ってあげる。
亜季 (笑って) え、何それ。

昭子、テーブルを避けて座る。

昭子 亜季。
亜季 はい。
昭子 (自分の前を示し) ここに座りなさい。
亜季 (笑って) ええー。
昭子 いいから座りなさい。
亜季 (笑いながら立ち上がり) はい。

亜季、昭子の前に座る。

昭子 木村亜季。
亜季 はい。
昭子 このたびは、(頭を下げ) おめでとうございます。
亜季 (頭を下げ) あ、ありがとうございます。
昭子 しかし、順番が違うんじゃないか？
亜季 はい。
昭子 はいじゃありません。
亜季 はい、ごめんなさい。
昭子 ごめんなさいじゃありません。
亜季 (笑って) はい。
昭子 許しませんよ。
亜季 (笑って) はい。
昭子 私は許しませんよ。

亜季 はい。
昭子 木村忠夫と歌子が許しても、この鈴木昭子は、許しませんよ。
亜季 はい。
昭子 亜季、歯を食いしばりなさい。
亜季 (驚き) え、殴るの？
昭子 (驚き) え、嘘、違う？
亜季 え、殴る？ 殴る？ 普通。
昭子 え、嘘、なんか、こういう時ってほつぺた叩かない？ 普通。
亜季 え、わかんないわかんない。
昭子 え、じゃあやめるやめる。
亜季 え、いや、叩く？ 叩くの普通？
昭子 え、わかんないわかんない。
亜季 あ、じゃあなんか、こう、軽く。
昭子 軽く？
亜季 なんか。
昭子 (笑って) え、軽く？
亜季 (笑って) いや、なんか。
昭子 (笑って) え、軽く？
亜季 なんかこう、ペチンって。
昭子 (笑って) え、怒ってる？ それ。
亜季 (笑って) え、わかんないわかんない。
昭子 え、やめる？ やめとく？
亜季 いや、いいいい。やってやって。
昭子 え、やる？ やるの？
亜季 いいいい。やってやって。
昭子 あ、はい、えー、軽くね。軽く。
亜季 (目を閉じる) うん。
昭子 えー、はい。じゃあはい。
亜季 はい。
昭子 いい？
亜季 いいいいい。
昭子 はい。
亜季 はい。
昭子 はい、いきます。
亜季 はい。

昭子、手をあげる。

一瞬ためらい、亜季の頬に手を添えるように叩く。

昭子
こら。

亜季、目を開く。

二人、目が合う。

亜季、頬をおさえ、うつむく。

亜季 あー……。

昭子 (慌てて) え。え。

亜季 ……痛い。

昭子 え、嘘、痛い？ 痛かった？

亜季 あー……。

昭子 やだ、ごめん。亜季ちゃんごめん。

亜季、次第に笑い出す。

昭子 え？ え？

亜季 (笑いを堪えながら) 痛あい。

昭子 え、痛いの？ ねえ。

亜季 (堪えながら) ……。

亜季、顔を上げる。

二人、目が合う。

二人、笑い出す。

昭子 ごめんね。

亜季 痛あい。

昭子 亜季ちゃんごめんね。

亜季 もお。

昭子 ごめんねえ。

亜季 もおー。

昭子 ごめんねえ。亜季ちゃんごめんねえ。

二人、笑い続ける。

終わり